

歴史の狭間で響く中国60年代生まれの声
—周慶栄の散文詩『我ら』と『我ら・2』が告げるもの

History will not silence those who were born in the 1960th
What the poems “Us” “Us 2” of Zhouqingrong tell us

林 美茂

Dr. Lin Meimao

中国人民大学哲学院

School of Philosophy at Renmin University of china

E-mail : mimolin1230@yahoo.co.jp

提要：中国当代历史上，存在着很特殊的一代人，那就是 20 世纪 60 年代出生的一代。这一代人与文革青年（主要是 50 年代出生的人）相似又有区别，而与 70 年代出生的一代人在价值观上又有很大的差异。60 年代出生的人处在历史的夹缝中，青少年时代接受过理想主义、英雄主义教育，而生存的现实已经不再需要他们的理想，英雄主义的行动也不被允许。这一代人是容易被历史和现实忽视的一代人。至今为止，还没有人专门把这一代人作为问题，思考着他们在历史中的定位，然而，中国现在正是这一代人开始主导历史的时期，这是不可忽视的、将会在中国历史中完成承前启后的一代。那么，这一代人的心灵遭遇、思想、价值取向究竟如何，近年来逐渐受到文学界以及读者们关注的中国当代著名散文诗人周庆荣的两组散文诗《我们》与《我们·二》能够为我们提供一个比较完整的线索，因为这两组作品的意义就在于揭示这一代人心灵成长史，堪称这一代人的一部精神史诗。

两组一共 46 章的散文诗《我们》，恰好是作者分别在 31 岁（《我们》31 章）

的时候，以及46岁的时候（《我们·二》15章）完成的作品。这种有意识的章节安排，暗示着作者写作的意图是关于自己心灵历史的省思，然而作者却不是写自己一个人的精神与心灵经验，而是在写一代人，所以他把全诗取名《我们》，体现出自己是为了一个群体在思考。在最初的《我们》31章中，主要揭示着作者的思考经历了即自性的生存境遇的审视、对自性地面对自己这一代人被拒绝的原因、最后抵达即自且对自的精神高度完成自我定立，使自己与世界的关系进入了一个全新的生存境界。在完成了这种精神的自省、自觉、自足、自立之后，他暂时离开文学创作，到了2008年，即15年之后又重新创作了《我们·二》，这时“我们”这一代人已经人到中年，告别了总在历史的台下作为观众的境遇而走上了历史的前台。生存境遇改变了，作品中的叙事背景也今非昔比。因此，在《我们·二》中，作者从审视历史所给予的舞台出发，揭示“我们”自我展现时区别于前辈们的，属于“我们”这一代人的姿态。

“我们”的前辈生活在“斗争”的历史里，由于缺少宽容，使他们自己也给历史带来了苦难和疼痛。而“我们”这一代人已经从虚幻的理想主义走出，带着现实主义的理想主义面对当下生存，从前辈和自己一代人所经历的各种自足与自立的磨难之中认识到宽容的意义。所以，明确宣言自己是“宽容的一代”。“我们”这一代人的理想是“让每一个人享有各自的空间”，“我们最幸福的事是让我们中间那些感到不幸福的人，也能够一起幸福”。就这样，作者在这两组作品中所揭示的60年代这一代人的生命姿态是没有埋怨、牢骚，更没有仇恨和敌意，这一代人区别于前辈的根本之处是他们心中不存在生命的阴影，只有自己一代人对于自身的审视、境遇的反省与认同以及对于崇高而宝贵生命的深情讴歌，其面对历史的态度以及面世的价值观，都体现着前辈们不曾有的豁达与宽容。作者通过这两组散文诗，企图代表着一代人，向社会和历史发出了“我们”的存在所具有独特意义的宣言。

关键词：散文诗，周庆荣，60年代，我们，历史夹缝，一代宣言

周慶榮、男性、1963年江蘇生まれ、北京在住。蘇州大学英文科卒、大学教師を経て、北京大学の国際関係学院へ進んだ後、北京で投資会社を起し、事業の成功を収めた。彼は投資企業グループの会長を務める傍ら、詩作活動を続け、現在中国の代表的な散文詩人の一人として注目を集めている。2009年に、同年代の散文詩人靈焚、亜楠等と一緒に、中国文学史上最初の散文詩人のグループ「私達」を組織、全国から入会した詩人は一年足らずで150人を越える勢いを呈している。今、中国現代詩界における「私達」の影響力は拡大する一方である。既出版された代表作は主に『愛、一本の月樹なり』、『風景のような歲月』、『我ら』などの単行本がある。近年に、『理想のある人』、『英雄』、『時間』、『夢想』、『溪谷・シリーズ』など、新作が次々と発表され反響が広がっている。

歴史の狭間で響く中国60年代生まれの声—周慶栄の散文詩『我ら』と『我ら・2』が告げるもの

現代中国では、1960年代生まれの世代は非常に特殊な存在である。完全な「文革青年」になりきれない一方、改革、開放時代で生れ育った世代とも生き方が相容れない。つまり、「文革青年」と同様に、「英雄主義」や「理想主義」の教育を受けたが、青年時代に入るや否や、中国社会においては「英雄主義」や「理想主義」の時代が終わり、人々の価値観は理想よりも現実の利益主義に傾き、それにも同調すること安易にできかねない中途半端な世代となってしまった。敢えて言うと、狭間に生きる「つり下げられた世代」である。この世代は、現代中国の歴史を取り上げる際に、極めて見過ごされがち、忘れられがちな世代である。しかし、この世代を見ずに現代中国を取り扱うのは、本当の中国の現在、そして未来が見えてこないと筆者は思う。まさに此れゆえ、本論文は1960年代生まれの世代をクローズアップして、この世代の文学作品、しかもその姿を最も映し出している詩の作品を通して、見過ごされてきた現代中国のもう一つの側面を浮びあがらせる。

周慶栄はこの世代の代表的な詩人のひとりである。この論文で彼を選んだ理由は、彼の代表作の一つである『我ら』には、一世代の心の歴史が提示され、1960年生まれ世代の境遇、格闘、反省から形成された価値観、人生観、世界観が綴られているからである。この世代の声を聞くのに、二つの長編散文詩『我ら』と『我ら・2』を一冊に編纂した『我ら』（訳林出版社、南京、2010年5月）は、重要な手がかりになると筆者は考える。

それでは、『我ら』を読み解いていこう。

一、歴史の経緯から問題を提起する

一体どれだけの人が以下の問題について真剣に考えていたかは不明である。「我ら」世代が今日の中国においていったいどう位置づけられるべきか、また歴史は如何にこの世代を受け止めるのか、等等。ここでいう「我ら」世代とは具体的には20世紀60年代生まれを指す。この世代の人は「文革」と関係しているのだが関係していないように扱われている。70年代の世代となんらかの関連性を持つがやはり違っている¹⁾。いわゆる「80後（1980年以降の生まれ）」とは価値観の面で全く違っている。筆者は、本論文で考察する「我ら」は主に「文革青年」と違うという事から「我ら」世代の境遇を分析する。

所謂「文革青年」の大多数は50年代生まれであり、若い頃に政治運動に浸りきって、自分の運命は政治の天候に左右され、彼らの感情と思想は政治の色に浸透されているので

1) 筆者はここで時間的に世代を分けているが、厳密な区別ではない。40年代末生まれの人と50年代初頭生まれの人はだいたい同じ枠に入ると考えてもよい。また60年代末と70年代初頭の世代間では価値観の面で似ているところもある。したがって、ここでいう「60年代」というのは50年代末から60年代末生まれの人達を指すのである。

ある。「文革」の10年は彼らの魂に深い傷跡を焼き付け、その傷跡は後に彼らの勲章となり、傷跡は彼らに批判者と殉教者としての自覚を促し、この傷跡によって文革が終わった時、現代社会に入るにあたっての勲章となったのである。それゆえ、いままでに論じられてきたように、単に歴史が彼らの10年を奪ったと考えるのではなく、同時に歴史は彼らに10年を与えたと考えなければならない。まさにこれゆえ彼らは「暗黒は私に黒い眼を与え、私はかえってそれをういて光を探し求める」（顧城『一世代の人』）と叫ぶとき²⁾、中国全体は彼らに共鳴する。また、彼らは「もし海洋が必ず決壊するものならば、あらゆる苦い水という水をわが胸に注ぎ入れよ」（北島『回答』）と宣言するとき³⁾、「文革」後の中国社会全体は彼らの殉教者としての英雄主義の姿に感動させられた。彼らは自分たちがひとそびえの記念碑になる（江河『記念碑』）と自負し⁴⁾、歴史と現実を思考し、彼らは祖国の歴史に冷徹な批判と甚深な関与意識を抱くのである。彼らは自分が「どんなに取るに足りない存在だとしても恐れず、ただ自分の出来ることを尽くせば」と、また後の人に「入り乱れた足跡を残せば」と自覚している（舒婷『我が世代に捧げる』）⁵⁾。これがまさに「彼ら世代の人達」の価値観である。歴史はまず彼らに成長の辛さを与え、それによって彼らは痛みの経験と理想の自覚を得たのである。それ故、彼らは自分達の持ち場に対して極めて明確で、これらの持ち場の自覚の多くは歴史からの選択によってもたらされた。

而して60年代生まれの「我ら」の世代は顕然と違っている。大学受験に参加するとき「我ら」は最初に「老三届」と競争せねばならない。改革開放の当初、「我ら」はまだ校門から出たばかりの青二才であった。一人っ子政策も「我ら」の世代から実施され始めた。官僚機構の「老中青」（三結合）体制を作る時「我ら」は資格が足りない。国営企業改革によって大量リストラ（下崗）が発生したときに、文革の世代は早めの定年が可能になるが、「我ら」は真正面にリストラの波を受けてしまうのであった。それゆえ、「我ら」は社会に出るとき、ただ「彼ら世代」（文革青年世代）の陰で生きていかなければならなかった。他方、この世代は70年代以降の世代のような超然、悠然とした生き方にも同調しない。つまり「我ら」は何も恐れずに目下の生活を享受することはできず、絶対に「私はどんなにあなたの膝の上に座りたいか、あぁ、なぜなら、こんなにあなたのことを想っているのだから。／ある妻子を持つ男をかどわかす」（尹麗川『かどわかす（挑逗）』）⁶⁾と告白する勇気がない。また「えびせんが好きな青年が女の多元な胸の谷間をじっと見つめる、その中から甘いオイディプスの思い出を吸い取ろうとする」（胡续冬『Marley喫茶店』）

2) 顧城1956年生まれ。

3) 北島1949年生まれ。

4) 江河1949年生まれ。

5) 舒婷1952年生まれ。

6) 尹麗川1973年生まれ。

歴史の狭間で響く中国60年代生まれの声—周慶棠の散文詩『我ら』と『我ら・2』が告げるもの

心情もない⁷⁾。さらに仕事の帰りに「興奮で訳の分からない影のように」夕日の中に歩き、まず一分間の恋人との逢瀬の後帰路につく（蔣浩『陥落』⁸⁾）こともできない。なぜなら「我ら」は人生を享受する条件がなく、70年代生まれのように「私は享楽主義者になる」⁹⁾ことを追い求めたり、「この世界を使い果たす」（李小洛『私は享楽主義者になる』）こともできないからである。60年代生まれの人は、疲れたときや気分がすっきりしない季節に、せいぜい「私は億劫で動きたくない／ベッドに横たわり続ける」（趙麗華『ベッドに横たわり続ける』）ことしかできない¹⁰⁾、等等。70年代生まれの人達は相対的に開放的で大胆かつ明朗な生き方をしている。而して60年代生まれ、すなわち「我ら」の生活と現実、ただ「夢をもって馬とし」、「明日から、幸福な人になる」（海子『大海にむかい、春暖花ひらく』¹¹⁾）と自分を慰め続けるしかない。これはまさに60年代生まれの世代の姿である。「我ら」は文革の記憶があり、影響も受けている。ゆえに「我ら」はときどき痛みを感じ、しかし「我ら」の傷には痕跡がない。このような傷は「我ら」が歴史に選ばれる過去の経験とするには足りないのだ。したがって、ある意味では60年代生まれの「我ら」世代は「つり下げられた人」だとも言えよう。「我ら」は歴史に不満をぶつける十分な資格もなく、また歴史に選ばれる十分な経験もない。これがすなわち「我ら」世代の境遇と当惑である。

さて、「我ら」世代はいったい如何に生きるべきか？いずれにしる、歴史がすすんで「我ら」を選ぶことがないならば、「我ら」は自分で自分自身を選ぶ他はなく、また自分が歴史を選ばざるを得ない。まさに自分は現実に進出する姿勢を選択せねばならないが故に、この世代は生きる思考がそれぞれ違ってくるのである。まさにこの原因で、前に述べたような「彼ら世代（文革青年）」のように、「私の同世代」（舒婷）という強烈な世代意識を持っていない。詩人周慶棠の46章の散文詩『我ら』と『我ら・2』¹²⁾の最大の意義は、「一世代の人達の共通問題を考える」こと、さらには「我ら」世代の共有意識から出発して、現代中国の歴史に押さえられてきたこの世代の声を高らかに叫び出すことである。この作品は60年代生まれの人達の境遇と姿勢と心の写しであり、作者と同年代の人達の境遇を自覚する一部の宣言書だと言っても過言ではない。この作品で作者が提示する思想の

7) 胡续冬1970年生まれ。

8) 蔣浩1972年生まれ。

9) 李小洛1970年生まれ。

10) 趙麗華1964年生まれ。

11) 海子1964年生まれ。

12) 周慶棠1963年生まれ。『我ら』（全31章）は1993年に完成した彼の31歳の時の作品であり、『我ら・2』（全15章）は46歳の時の作品である。つまり、彼は最初の『我ら』を発表してから15年後、『我ら・2』を発表し、意識的に自分の年齢に合わせて創作した。この創作課程を通して私達はある程度作者の創作意図を伺うことができる。

幅は前の世代と後の世代との違いが鮮明であり、これは60年代生まれの人達の理解と把握において重要な価値を持っている。

周慶栄の『我ら』は、自分世代の境遇、歴史の中で如何に位置づけられるかの思索、及び生きるべき姿などを人々に提示している。言い換えれば、彼は自分が時代に関わっていく鮮明な意志、「我ら」の歴史境遇の当惑した自覚を冷静に見極めている。独立自足で寛容明瞭な処世態度をもって「我ら」世代の泰然として闊達な存在を宣言している。この点に関して、彼自身は未だ十分に意識していないか、或いは認めようとしていない。にも関わらず、「我らに宣言はなく、ゆえに如何なる宣言にも牽制されない」（第27章）という詩句を通して、鋭い読者なら彼のこの言明と作品『我ら』全体も既に宣言として成り立っていることに気づくだろう。より具体的にいえば、作者は『我ら』と『我ら・2』における冷静かつ明朗な詩的叫びで、その一節一節ごとに「我ら」は如何なる存在であるかを提示し、「我ら」の境遇、また姿勢が如何なるものか、また「我ら」は如何に自分が歴史に与えられた役割を担っていくかなどの問題を解き明かしているのである。

本論文に取り上げる両作品は、その執筆時期が15年隔たっており、「我ら」の境遇には大きな変化があったにも関わらず、提示されている内容と思考はほぼ一致している。それゆえ両作品は基本的にひとつの完結した問題として把握することができる。『我ら』の31章は大きく三つの部分に展開され、最初の「即自」的思考（1-10章）から「対自」的思考（11-23章）を経て、最終的に「即自かつ対自」的な存在措定（24-31章）に至る。最後に「我ら世代」の生きる理想、そして現実に向かう姿を提示し、この世代は自分の所在を探り、自分の境遇を見つめ、自分達の現実と歴史における位置を決定づけるために一連の思索過程を表明する。これに対して『我ら・2』は15年後の作品として『我ら』を補う内容になっている。ここでは主に、「我ら」が現実社会という舞台上に踏み出し、歴史に与えられた使命を担っていくに当たっての視点から、「我ら」の処世態度、価値判断、運命の自覚を表している。それゆえ、『我ら』の第三部分において「即自かつ対自」的な自己意識を確立した後、この『我ら・2』の15章は、「我ら」世代がとった一種の積極かつ明晰な自己実現の意義に対する選択として、見事に『我ら』の三部分の内容に続くものとなっており、両作品をひとつのものとして見るとき、この15章を第四部分、第五部分、第六部分として繋がっていくのである。これによって「我ら」世代の境遇と思想の全貌は、ほぼ完結した形として提示されたのである。

二、境遇の自覚と自我の明確な位置づけ

『我ら』の冒頭において、作者は明確に「我ら」世代の境遇を指し示している。それは、「孤独にして美しい」、「我らは自分で自身を暖める」、「我らは無視されずに生きることを

歴史の狭間で響く中国60年代生まれの声—周慶栄の散文詩『我ら』と『我ら・2』が告げるもの

試みるが、一生のなかで最も輝かしいのはただ寂寞と忘却、「人々の前で強がりはいわれ唯一の表情である」という文句にしかと綴られる。

なるほど、「我ら」世代はいつも「無視され」、「我ら」は歴史の規定の中で「寂寞と忘却」に生きている。それゆえ、「我ら」は「自分で自身を暖める」以外に選択の余地はない。これがまさに「我ら」世代の現実の境遇である。

中国の改革開放第一段階（「南巡講話」まで）には、生存の現実の中において、60年代生まれの人々は政治舞台とは無縁である。「我ら」は前述した「文革青年」世代に協力するだけで、せいぜい時代の脇役に過ぎない。改革開放という新時代の代表はそれらの兄弟達だけで占められる。歴史が「我ら」に与えた生きる現実、望むことはできても叶うことはない、つまり「無視され」ることだけであった。散文詩『我ら』はちょうど1993年に完成された作品で、改革開放の第二段階、すなわち「加速」期に入るところである。「我ら」は自分の境遇を自覚し、自分が如何に生きるか茫然としている一方で、自分はいつまでも時代の脇役である運命に甘んじないのだ¹³⁾。このような格闘は『我ら』の至る所で読み取ることができる。

『我ら』の中で、作者はまず「無視され」、というはっきりした境遇性の自覚を表明しているが、この自覚は社会生活から得た経験の結果である。彼は言う、「一度ならず、我らは手を伸ばせば毎回必ず報われることを望む。一度ならず、我らは熱烈な回想を抱き自分のこの手が拒絶されないことを望む」（第2章）。しかし、現実と願いは異なる。「我ら」の願い通りにならず。「我ら」が数限りなく手を「伸ばし」ても往往として拒否され、空気のような「虚無」を握っているに過ぎない（第2章）。それゆえ、「我ら」はこのような境遇の中で生き抜くためには、ただ「自分で自身を暖める」だけだと自覚させられる。では、如何に「暖める」のか？ 作者は、作品の中で一世代が自覚すること、自分を励ますこと、自信を持つことを提唱する。

人は自分の生きる現実と直面するときにとる態度がそれぞれ違っている。歴史に触れながら憤然と批判する人もいれば、自分の傷跡を露わにし悲劇的な過去を強調する人もいる。このような態度はいずれも「我ら」世代の所為に相応しくない。「我ら」は過去の歴史のベールを剥がし、真相を暴き出す事ができない、故に、「卑劣は卑劣な者どもの通行証」だと叫ぶ（北島『回答』）ことではなく、「我ら」はただ「困難にぶち当たると、紆余曲折に終わりがあるとひとりごち、中傷されると次の楽しみの前奏であると思ひ描く」（第8章）ことしかできない。これは「我ら」世代の生きる自覚である。なぜなら「我ら」は

13) この原因かもしれないが、作者は本作品の完成後間もなく（1995年）創作活動を離れ、虚しい境遇の思索から歩み出し、筆を捨て商売の世界に転身し、価値観が日増しに多元的になっていく社会現実に身を投じ、新時代の生存競争の実践に移ったのである。

「あらゆる卑怯な人は我らより多く得ることがない」(第8章)と確信しているからである。ここで作者が示しているのは「我ら」世代の闊達と強さであり、当然、このような心構えは「我ら」が自らの境遇に対する自覚ゆえのものであることが明らかにされている。自覚があるからこそ「我ら」は「拒絶される」結果を予感している。それゆえ「我ら」は歴史に不満をぶつけること、更に歴史と現実を罵ることがなく、逆に「美しい星の光のような運命をつかもうとする」(第2章)のである。それは「我らがまさに若い時節にいるから」、自分の手で「唯一無二の生命に触れ当たる」(第2章)ことを信じている。「我ら」は自分の智慧と血潮だけで生活を創出し、自身の存在を証明する(第8章)。

したがって、これは一種の現実生存における自らの励ましと自信を表している。同時に「我ら」世代が持つべき現実自覚と置かれた境遇を受け入れた後に、自己の位置を然るべく定めることをも意味する。

三、境遇の原因と自立の姿勢に関する反省

さて、自分の境遇は上述した自覚があった後、作者は「我ら」がなぜこのような境遇に強いられたのかを反省し始め、この世代のあるべき価値観と自足自立の可能性を探る思考に入る。

まず、作者は「我らが路程の中で、一つ一つの充分な理由を見つけ」(第3章)、自らを説得するが故に、問題の根源はまず自分自身にあることに気づく。「嘗て我らに手は差し伸ばされた、だが我らはそれを無視したのだ」、「嘗て一曲の歌は我らの耳元に響いていた、だが歌手は依然として我らの冷淡に遭遇する」(第4章)。それは「我らがもっと重要なことをせねばならぬ」(第4章)から、或いはひょっとしたら「我らがあまりにも自分を愛する」(第3章)が故かもしれない。「我ら」は「自分と大衆が同じだと宣言する」が、「さらなる甚深な注視を受けねばならぬ」(第6章)のだ。此れが故、雪が降り積もる夜、或いは寂寞を感じた時に、「我らはひとときの間他人を思い出すかもしれない」(第4章)。

明らかに、「我ら」という存在が「無視される」原因はまず自分が他人を無視したゆえに発生するものである。すなわち、他者を拒否する姿勢は自分が拒否を受ける原因の一つとなり、自分は最初から「拒否」の態度を示しているから、現実において拒否されたのである。だが、このような「拒否」の姿勢を取ったのもそれなりの原因がある。その原因が二つあるように見られる。ひとつには、自分は先人と同じ道を歩むことを恐れるからである。「我らは現地に留まっても、道路は繋がっているから、依然として先人と同じ道を歩んでいる」(第5章)ことになると作者が指摘する。もしそうなるならば、「我ら」が自分の追い求める「唯一無二」の生命理想と衝突することになるからである。もうひとつには、もし先人が歩んだ道を選ぶなら、「我らが明るい顔であらゆる人を迎えよう」としても、

歴史の狭間で響く中国60年代生まれの声—周慶栄の散文詩『我ら』と『我ら・2』が告げるもの

「前に小河を渡った人はその橋を取り壊し」、「我ら」はこのような拒絶、つまり「裏切りと不忠」という苦い経験に直面することもあるからである（第7章）。したがって「我ら」は「遠方のその空」を「ふんわりと暖かい場所」だと思い描いても、やはりただ「依然として今の居場所に寄り添う」（第5章）しかできず、なぜなら、それだけが最も安心だからである。

このように、拒否する姿勢の中で、作者は明確に人々に告げる。「何人たりとも我らを説き伏せることはできぬ、我らは永遠に我らなのだ」（第5章）。而してこのような「我ら」はただ「信念のために生き」、しかも常に「絶対倒れるな」、大衆の前を歩む時「強さとは我ら唯一の表情だ」（第6章）と自分に注意を促す。「我ら」はただ一群の「孤独に行く者」で、「一本の最も静かなる道」を自足自立で歩いていく（第7章）。

ヘーゲルは存在と世界との関係について三つの発展段階を総じて論ずる。最初は「即自的」存在、すなわち自己存在に対して自足性的な認識を持っている。しかしこのような存在は他者の媒介を欠如しているがゆえに確立することができない。そこで「対自的」存在の意識が必要となる。つまり他者と直面することによって自己存在を反省することになる。而して、「対自的」存在の場合、自分自身を失わないために、もう一度自分自身に戻る必要があるで、それで初めて「即自かつ対自的」存在の境地に達し、すなわち自分自身を維持する自覚を持つ一方、他者意識の媒介をも成り立たせながら、自己存在を確立するに至る。世界において如何なる自足性的存在の真の自立を実現するには、ただこのような「即自かつ対自的」な自覚によって初めて完成する。

「我ら」世代は正に「無視される」がゆえにひたすら自足と自立を求めるが、もしこのような追求が単に他者を「拒絶」する段階に留まるなら、無意味な「即自的」存在を固守するに過ぎず、真の自立を完成しないであろう。なぜなら、「我ら」はこれと同じように、自分の「拒否する」姿勢によって「距離と疎さに不安を抱く」（第9章）がゆえに、他者との対面によって、自分もし拒否の段階に留まるならば、そのような「我は極めて取るに足らぬ卑屈な存在である」（第9章）ことに気づくからである。作者はこの点について非常に明確である、それゆえ彼の思索は発展を続け、次に「我ら」は「それらの本来同時に同じ舞台上に登ることができない人達と協力しあう必要があるかどうか」（第9章）ということを省察する。さらにもし必要であるならば、「我ら」は如何なる「和解」の姿勢をとるのかをも考慮せねばならない。

以上の内容は、「我ら」世代の心の道程を鮮明に描き出している。それは一方では傷を負わされ、他方闘達も必要とし、「拒否」も必要だが「承認」をもせねばならない。言い換えれば、「拒絶」を通して自分を見いだせるといえども、「拒絶」によって自らが拒絶され孤独に陥ることも恐れているのである。

四、「我ら」から歩み出すことによる「我ら」の確立

「我ら」がこの点を認識するに当たって、自己の境遇の原因を明確に自覚した後、自己と世界の関係はひとつの新しい生存の境地へ入る。ここにあって、「我ら」は泰然としてこの世界へ向けて自己の生きる態度を表明する：「我らは如何なる人をも傷つけたくはない、当然他人から傷つけられるのも望まない」、「我らは一人の善き人、また悪賢い人に至るまでも欺きたくない、同時に誰も我らを欺いて欲しくない」、「我らの楽しみや幸福を他人の沈鬱の上に実現させたくはない」（第10章）。ここで発する所の声は、明らかに「我ら」の処世の理想と宣言を代表し、作者が用いているいくつかの並列した連句は、「我ら」と他者に関係が生じたときに自己の「追求すること」と「望まざること」を表明している。而してその実、これらは「我ら世代」が理解するところの「生命の自在さと鷹揚さ」なのである（第10章）。こうした望みと理想はあたかも「我ら」世代の「永遠の恋人」のようで、「我ら」に「愛し愛される中で生きる、何も心配はいらぬ」（第10章）。

実は、普通の状況においてこの散文詩はここに至った（第10章）時点で本来完成としてよい、もしくは既に完成したと言ってよい。しかしながら、作者は依然として歩みを進め、自己の表明の解釈を展開し続ける。なぜ31章なのか、原因はどこにあるのか、これは人を困惑させる。一方では、もし作者の年齢と創作時期から見れば、作品を書いたのはちょうど31歳のその年であり、章の数を設定したのは何か関係があるのか？他方、この作品は一气呵成で書き上げたものではなく、途切れ途切れに思いつくまま書き綴った思索の備忘録であると考え人もいるかもしれない。またすなわち、この散文詩は全体的に構成展開されたものではなく、章の数も随意的なものだと考えられる。ただ、筆者がこれ以降の21章の内容に隠された構造を見たとき、作者はほとんど意図的だと感じ、もしくは『我ら』を創作するとき全く随意ではないと言えることにも気づく。たとえば作者自身が無意識的に「即自」から「対自」へと進み行ったとしても、最後には「即自かつ対自」への展開過程へと到達し、整然とした作品構造になっている。もし先に述べたように第1章から第10章の全てが一種「即自的」存在の内容だとすれば、それなら、第11章から第23章において、作者が思い述べる内容は基本的に全て一種「対自的」存在の視点で講じる態度であることは明らかだ。また第24章に始まり第31章に至る部分では、すでに自我完成が高度に展開された「即自かつ対自的」存在という角度から叙述している。そのように見るとこの散文詩に内在する構造はかなり厳密なものとなってくる。たとえ章数が随意でも、内容はほぼ完全である。

第11章において作者がまず「我らに選択の余地はない、人にあざ笑われるか褒め称えられるかだ」と自覚し、それゆえ「一世代の人達」の共通問題を思考しているのだと宣言する。ここには明らかに他者に注意を向ける眼光が出現し、またそれは社会が「我ら」に

追い求める評価問題でもあり、この種の考え方は「対自的」存在の考えである。続けて第12章では困惑と自問を告白する。すなわち「どれだけの道が我ら自身に真に属するのか？ どれだけの風景が我らが生命の真の象徴なのか？ どの往事を自ら輝かしい主役にするのか？」；第14章では「我らは問題を抱えながら答えを探し求める世代」だごまかすことなく承認する。当然抱えている問題は自分だけの問題でなく、しかもその答えを自身の中に完全に探し出すことは不可能である。それゆえ、作者は言う、「我ら」が他者と「同じ太陽と青空の下、前に聳える黛色の連山と一抹の慈愛に溢れる紅雲を眺む、かえって人類の持つ差異を忘るる」（第16章）と。この態度と先の「遠方のその空」を「ふんわりと暖かい場所」（第5章）と表現する態度ははるかにかけ離れている。「ふんわり」は同年代人の中でのみやっと現れ得る律動であり、而して「慈愛に溢れる」とは年長者と対面したときにこそ得ることのできる感情である。したがって、ここで叫ばれる「差異」を忘れ去る理想の体現はある種の「対自的」存在の目覚めなのだ。この種の目覚めの後、「我ら」はやっと「往古より連なり聳え立つ高峰を尊重し、しかしこれらは我らに属さず、我らもまた以前一度一度の偉大な活動に自ら参与できなかったことを後悔せず」、それは「実現できない」（第18章）幻想だったからであると悟る。この境地に至って、当に「我ら」が再度空に向かい手を伸ばしたとき、もう二度と「虚無」の空気を掴むという感覚はなく、而して空気が指の隙間から「自由に滑り去る」という感覚を覚える。「我ら」はまだ一群の「天涯をさすらう者」とはいえ、「我らには我ら自身の住処がある」（第19章）。そのため、「我ら」には「永遠に繋ぎ止めるものがあり、我らは如何なる力にも所有されず、しかしまたあらゆる力の所有するところとなる」（第20章）。このような悟りは「対自」意識を持つに留まらず、もはや「即自かつ対自」が飽満し露わになっている。このような高みに到達してはじめて「我ら」は元来の自己の追求から、一步進んで自己に向き合い、これによってまずは自己を放棄し、放棄した中から本来の自己への回帰を手に入れるのだ。したがって「我ら」はやっと自己が「忘却の淵に陥ることを渴望しているかのごとき、一群のありふれた人間」であることが分かった(第22章)。

このように、作者はこれらの章節の中で、主に「我ら」が如何にして我々「自身」を脱却した後に「我ら」の存在の思考を獲得したかを明らかに示すことにあり、「我ら」が曾ての狭隘と偏屈を突破したことが、「我ら」の存在に具体的な内容と飽満・豊富さを併せ持たせたのである。

五、「我ら」の故郷は「我ら」自身のみ

作者は前述の「対自的」存在の思索を完成させた後、再度「我ら」自身の存在に対する把握に戻った。第24章から始まる詩の内容には、はじめの10章での「即自的」思考の時

にはなかった闊達さと従容さがはっきりと表現されている。ここで、「我ら」は率直に自身が「寛容さを身につけ」(第24章)、「賛美と粉飾を学び得た」(第25章)ことを認め、それゆえに「安易に言葉を強烈にしない」(第26章)。それゆえ、「我ら」は「足取りが軽やか」になり、「阻隔」を恐れず(第27章)、「我らの魂の青い鳥は翼を広げあの最も蒼々とした空の高みにまで向かおうとしている」(第28章)。この高みからはっきりと見て取れたのは、自己が曾て「風景」によって拒否され、世間の「我ら」に対する「失望」は我らの「固執」と「無視」によるものだけということであった。それによって、「如何なる人も我らを拒否せず、如何なる歴史と現実も故意に我らを孤独に追いやらない」とわかった(第29章)のである。我らが故意に示す「拒否」の姿勢は実際のところ真の意味での拒否ではなく、単に「我ら」が「みんなの願いにつながる道を進む」ことを夢見ていただけのことだ。だから、実際のところ「我らはいかなる人も拒否しておらず、いかなる歴史と現実も拒否していなかった」。このようにして、作者の中で「我ら」と「他者」が和解を遂げた。もちろん、「我らの快樂はただ孤独との自然共存でしかない」(第30章)ので、この「和解」も、もしかしただの願いに過ぎないのかもしれないが、「我ら」も恨みも悔いもない。

ここまで、作者は再度徹底的に自身の存在を見つめなおし、それによって「即自かつ対自的」存在の自覚を完成させた。彼は「我らに属する道はもう走り終えた」、「我ら自身の歌はもう歌い尽くした、明日に依然として鳴り響くのはほかの人々のまったく新しい歌であらう」と指摘する。将来、歴史がどのように我らを評価し、我ら省察するのか、「我らの過去の痕跡を探し求める」のは当然「我ら」ではなく、自然の結末であるが——「我ら」の子孫である(第31章)と自覚した。

では、最初に言及した問題に戻ると、明らかに「我ら」世代は60年代以前に生まれた「文革世代」ほど深刻さはなく、70年代生まれほど自由でない。60年生まれ「我ら」は努めて「生命の自在」を追求してきたものの、自由自在に生きるのは難しく、至る所で他者の感覚に注意を払わなければならない。60年代以前に生まれた人々は「政治の中」で自己を見出し、70年代に生れた人々は「社会の中」で自己を見出したが、60年代生まれの「我ら」は英雄主義からも拒絶され、享楽主義からも遠く離れていたため、「自分の中」から自己を見出すほかなかった。まさにこのようであったために、作者は一言で真相を喝破することができた：「我らは世代の宣言を持たず」(第27章)。つまり、我らには総体的に我らの世代をひとつの集団存在として受け入れる歴史と現実の媒体が欠けているというのだ。

当然、60年代生まれの人々のすべてが散文詩人の周慶榮のように、積極的に今この瞬間を信じ、つまり「今日がまさに最高の日」(第18章)だと信じているわけではなく、よって奮い立って自覚的にこの世代を代表し、時代に対して「我ら」の存在を宣言する人は少ない。この世代は多くの場合、ただ各々が内心に向かって歩み、自主自立の可能性を求め

歴史の狭間で響く中国60年代生まれの声—周慶栄の散文詩『我ら』と『我ら・2』が告げるもの

るのみだ。例えば、ある人はただ自分を慰めて「明日から、幸福な人になる」(海子『大海にむかい、春暖花ひらく』)；もしくはある人は星空を見上げ、「私はある人になり、ある一軒／ランタン揺らめく簡素な一室／この簡素な部屋の寒き屋根／群星の億万本の脚、それ祭壇に踏まるる」(西川『ハルガイに仰ぎ見る星空』)¹⁴⁾；またある人は虚無に向かい：「我らは何を知っているのか／我らは這い上がる／四周に広がる風景を眺め／そして下りてくる」(韓東『大雁塔に関して』)¹⁵⁾；そしてある人はぞっとするような孤独と格闘する：「身はいずこか知らず、我は我が深遠なる淵に臨み身はいずこか知らぬ」(靈焚『家屋』)¹⁶⁾；このために、また別の人は自然に神を求めた：「我に夢見さす者／遠くあなたを目で追い慕うだけ／ほこりほど厳しい口を守り／夢はそんなに遠く離れているのだ」(李見心『私に夢を見させる者』)¹⁷⁾ 等等、枚挙に暇ないほど多元な生き様を見せている。

「我ら」世代が示しているこのような非統一性は、「一世代」が連帯意識に欠け、多様化に富む。前述のように各々が自分自身の中から自己を見出し、自主自立を求め、自己の生存位置を確かめようとし、自己の生存理想を確立する葛藤の中でくっきりと現れ出づる。そういう意味で、『我ら』の作者が提示した「一世代」の連帯感は、ある意味では彼自身の心の願いに過ぎず、彼自身の生きる意志と理想を代表するのみかも知れぬ。もしかしたら彼自身がすでにこの種の無力感を持っていたのかもしれないし、でなければ彼がどうして「我ら」の存在は我らの子孫に定説を求める (cf. 第31章) とははっきり意識するだろうか。

しかしながら、この世代の意識的呼びかけと役割分担が「我ら」の世代にとってきわめて重要であることを認識しなければならない。「我ら」は「文革青年」のようであってはならない。革命ロマン主義から現実批判の英雄主義に向かったけれども、その本質はすべて「同質性」の集団政治意識の中に存在している。かといって「我ら」自分の以後の世代(70年代生まれ)のようであってもしなければならない。この後輩世代は政治を遠ざけ社会の各生存層に散らばり、享楽主義、または更に進んで退廃的な現実主義に陥ってしまった。「我ら」世代の人は潜在意識の中に政治参加に対する衝動がまだ存在しており、目の前の享楽主義の追求に対していい加減に同意せず、各自展開する自己回帰的自立傾向に対して、一世代の連帯の自覚を促し、「多様性」を呈する積極的な現実主義的世代意識の賛同を達成し、それによって「全体」ではなく「総体」的な生き方によって、歴史の深淵から自己の埋もれた姿、抑えられた声を発することで、「我ら」の存在に対する人々の記憶を呼び覚ますのである。

14) 西川 1963 に生まれ。

15) 韓東 1961 年生まれ。

16) 靈焚 1962 年生まれ。

17) 李見心 1968 年生まれ。

六、「我ら」が歴史に与えられた舞台に向う姿勢

先に述べた31章のような宣言的作品が完成した後、作者は一世代人の境遇と持ち場の自覚をもって文学から離れ、日進月歩絶えず進化する多元的な生存現実に精力を注ぎ込み、筆を捨てて商売に身を投じ、15年という歳月が経った。2008年になり、作者が"さえぎえと澄んでいた額にはすでに過ぎ去った年月が刻まれた"（『我ら・2』第4章）にみられる中年的自覚とともに文学に再び戻り、再び自分自身が15年前に残した一世代人の境遇の告白に直面した時、当時生きた境遇はもう変わっており、「我ら」世代は歴史の背景に埋もれた状態から次第に歩み出し、歴史の舞台の前に到達し、昔はただ観客でしかなかった生存状態から舞台上の役者に成り、自分達に与えられた時代的役柄の歴史性を担うこととなっていた。したがって、彼は甚深なる想いで再び筆をとり、引き続き15章の補充宣言を綴った（『我ら・2』）。この15章の作品の中で、作者は『我ら』31章の宣言式の叙情風格を継承したほか、内容の上では歴史的観察と責任的自覚を担う姿勢、そして生存境地に関する告白のような内容を加えた。

この15章中の第1章第一句において、作者は深甚たる声で情に溢れた告白をする："我らはどんなにあの静けさに充ち満ちた溪谷を恋着していることか"（第1章）。この一句はただ単に慨嘆しているわけではない。この一句には作者が15年間も書くことから離れた思いと、移り変わる世間万事に対する人生の悟りを含んでいるのだ。実はこの15章の作品が完成する半年前に、彼はかつて『私は溪谷なり』という力のこもった一篇の作品を書き、自分は「溪谷になろうと努め学ぶ」という理想を掲げていた。なぜなら、彼は"出来るなら一切を受け入れる"と自分に望んでいたからである。彼の理想は、「私が、樹木をそれぞれの特性に成長させ、一本一本の青藤が攀じ登る自由を与え、一輪一輪の野花が咲くのを励まし、多くの果実が苦辛酸甘を醸すことを許す；私は、ここにすべての動物が自分の家を造り、ここに靈狐（伝説の狐）を呼び寄せ、またここに蛾や虫けらに至るまでをも招待したい！」と言葉を放つ。これはある種の仁者の胸襟で、そしてこのような懐の広さは、まさに「我ら」世代の先輩達にはなかったもので、また下の世代には歴史と現実とに直面するための寛容な態度として、備え難いものであった。「我ら」の先輩達は「闘争」という歴史の中で生まれ、育てられ、寛容さが欠けていたがために、彼ら自身にも、そして「我ら」にも苦難で苦痛な歴史をもたらした。これは作者が「我ら」世代として経験した境遇性の目覚めで、理想から生きる現実に向かい、いろいろな自足や自立の苦難の中からある種の生命の境地に達した悟りでもある。したがって、この第一句は、ほぼこの15章の内容の方向性を決めたかのような役割を果たす存在であると言えよう。『我ら・2』は基本的には、このような心情に導かれて、展開されていく。

紙面が許さないため、筆者はここにおいて『我ら・2』に対する全面的な詳細分析をす

ることに代わって、作者の思想と世間の反応とその胸中の輪郭をとることにする。この15年を振り返ると、作者はまず私たちに、「他人の肩を頼る」（第1章）ことはならぬと、自分なりにはっきり認識したことを教えてくれた。これは前に述べた“我が故郷には我のみ”という認識と関係が深い。したがって、彼は自分が「遙か高き山頂」（第2章）から旅を始めたと考え、ここでの山頂は自分の出発の境地と視野を暗示している。高次元な視点が、旅路の姿勢を決める。故に、「我ら」は、最初は自分だけの「泉水」のような存在でしかなかったことを忘れることはなく、そして、泉水の流れる路は溪谷の低地であり、かくして自分を「遠くまで旅させてくれる」のは溪谷しかない（第3章）と自覚する。彼は遠方にある「畑」と「ひまわり」そして「河」、「大海」が自分のこれからの旅路と行き先であると知っている。畑においては、労働の意義を体得でき、汗水と果実の関係を理解し、そして泉水の存在価値を実現することができる。また、ひまわりは泉水に生存の信念を打ち立ててくれる。勿論、河は泉水が途切れることなく壮大になってからの情景であって、それは絶えず至る所の水を吸収した結果であり、そして大海は泉水が完全に自分自身の力量を発揮する真の舞台であることを暗示する。ここで最も私たちに注意を促すのは、「ひまわりに向かい行く」というイメージである。周知の通り、ひまわりは太陽の光しか選ばない、太陽に向かって煌びやかな頭を掲げる。我々は今までに見てきた作者のこの両作品、全46章の中で、「我ら」は不平、文句を漏らさず、更には憎しみや敵意も持たない。ここには生命の陰い影がなく、その情動が沸き上がってくるのは自分の世代境遇に対する認識と生命の謳歌、そして歴史と現実に対する豁達さと寛容さに尽きるのである。これは正にひまわりの品格であり、すなわち、ひまわりは如何なる時も、立ってさえいれば、太陽を探し求め、ひまわりは陰い影を拒絶し、変わって行く風向きにも蔑みの視線を送る。

このような品格を帯び、泉水が流れ出す時、このようなことを頑に信じていた：「我らが心から愛する大海は、ただの夢幻であるはずがない」（第2章）と。そして作者が予想していたように、歴史はいつも一世代の人に対して、その世代が主役となるような舞台を提供し、その中の相違は、時期が早い遅いかの違いだけである。15年後、「我ら」世代の人達も次第に中年に差し掛かり、最初の「曾ては最も良き観衆になるのが習慣となっていた」という境遇が変わり、「他人の台詞を聞き慣れた我ら」は、「今となつては、我らが舞台に上がる時だ」（第3章）と言いはじめる。気付かぬうちに、「我らは舞台の主役になっていた」（第3章）のだ。歴史が自分に与えたこの舞台に直面し、「我ら」はこのようなことをはっきりと認識した：「我らは数えきれぬほどの視線の焦点の先に立っている」（第3章）と。年長者の歴史と苦痛の経験から、「我ら」世代は教訓を汲み取ったゆえに、選んだ姿勢は明らかに異なる。

「我ら」は、生存は衝突と不可分であり、時として「闘争」は不可避であるを知っているが、「我らは手のひらを広げ、交流と友情を選んだ」（第4章）。「我ら」世代は「過去

のできごとは過去のものとして捉える」(第2章)ことではじめて「我ら」は遠くまで行くことができ、「次の風が吹いてきた時」には、「我らの歌謡を吹き飛ばし」、「我ら」をも遠くまで吹き飛ばしてくれることを知っている(第5章)。「我ら」は人類史上いかなる配役も旅人に過ぎぬことを知っている。従って、「我らの舞台はいかなる光の照射も受け入れる」(第3章)。「自己が他人の平凡を正に繰り返している」と自覚しているため、「我らが安易に他人の演技を否定することはない」(第4章)。これこそが「我ら」世代が目されるに値する特徴であり、「否定」ロジックを放棄し、自己の存在と「過ぎ去ったの歲月」は淵源を擁しているけれども、「我ら」は歴史の中の苦難な要素を克服する必要がある。否定な立場取らないが、もっぱら無選択に引き継ぐでもなく、「我らは記憶の廢墟を遠ざけ」(第7章)、「自己の旋律を探し求める」(第4章)。「我ら」は歴史を鑑とし、「史書を抱え、真剣に読み」(第10章)、寛容の追求を「我ら」の姿勢とし、「我ら」の楽章を作曲する。従って、「我ら」は歴史の表舞台に立つと、厳かに「我らは寛容な世代である、我らはただ互いに互いを照らさんと光を灯す」と宣言する(第6章)。

七、歴史は「我ら」世代の意義を認識せよ

「我ら」が知っている、十分に。中国の歴史において、憎しみと闘争の悲劇があまりにも多く繰り返されてきている。これが専制的制度から齎された結果である。なぜなら、専制は必ず反抗を引き起こし、反抗と復讐を防ぐため、敵を撲滅し、相手を抹殺するのは歴史過程においては行為のロジックとなっている。十年にも及ぶ「文革」は、個人崇拜と独裁政治の産物である。「文革」の社会環境で育てられた「我ら」より前の「文革青年」世代は、当然ながら憎しみと闘争の暗い影から逃れることが出来ない。故に、彼らは歴史と社会の空に「死者たちの湾曲した逆さの影」(北島『回答』)を見出せるし、血のような赤い黎明の中に「星のような弾痕」(北島『宣言』)を見る。彼らは「闘争はまさに我の主題だ」(江河『記念碑』)と宣言し、真理は正に「呪いが完成しないのを/銃に任せる」(同前)と認識する。このような闘争の価値観と対照的に、散文詩人周慶栄が『我ら』に提示した「我ら」世代は、文革を目撃したか、或は親類の被害を通して体験した闘争の現実がある。つまり、その中の一部の人はお親が迫害を受け、心に苦難と恨みの記憶を刻んでいるといえども、しかし、これらの経験は「我ら」に「闘争」を真理とする価値観を認めさせるのではなく、逆に、これらの経験によって歴史の荒唐無稽さに気づく。故に、この世代は憎しみと闘争の生存哲学を放棄せねばならぬことが判って、「我ら」が歴史の舞台に登場する時、「近所を遠方に見做され、醜さ或は卑怯も風景と化す」(第10章)。明らかに、寛容さの提唱はこの世代が先輩たちと峻別する「自己の旋律」(第4章)となった。

この世代の人達がこのように出来たのは、歴史的な苦い経験があった他に、もう一つ重

歴史の狭間で響く中国60年代生まれの声—周慶栄の散文詩『我ら』と『我ら・2』が告げるもの

要な要素がある、それは伝統的な価値観の変換という働きである。専制時代に生きた人達や、その年代で成長した人達は、「銃口から政権が生まれる」ことだけを信じ、抑圧と暴力は彼らが世を渡る時に転覆不可能な真理となった。誰は敵？誰は友？これは絶対に混同することのない二元対立的構造となっている。故に、彼らは「大地を、久々に一基の刑鼎に铸造し、我は誰の罪を審判する」（楊鍊『礼魂』）という、人を震撼させるような詩句を詠み、生きている時、力を与えれば、まず思い出すのはただ他者に対する「審判」のみである。散文詩人周慶栄には一つのエピソードがある。彼が北京大学に在学中、ある外国人留学生が中国を侮辱するのを聞いて、その場でその人に手を上げた。その後その留学生にあった時、まずその人に手を伸ばしながら次のことを言った。人のこの手は、握ると拳になり、暴力的道具として用いられるが、握り拳をひらき、人に差し出すと握手をし、友誼の橋にもなれる。君はどちらの方を選びたいのか決めてくれ、と、その留学生はやはり握手を選んだのである。このエピソードは非常に面白く、興味深い意味を含んでいる。それは、創造主は人間に一つの道具を与えたが、その使い方によってまったく違った働きをする、それはその人の価値観如何、ということである。

孔子曰く：「君子は和して同せず、小人は同して和せず」、ここで言う「和」と「同」はいったい何か違うのかについて、中国の歴史上においてかの有名な「和同の弁」が巻き起こった。一般の人は大体「和」と「同」を混同して認識するが、両者は違いの極りを内包している。つまり、「同」の内実には暴力性を帯びているが、「和」の基底には寛容さが流れる。多くの場合、我々はいつも無意識に「同」のロジックを以て「和」のロジックにするが、実際、両者には天と地ほどの開きがある。中国の幾千年の封建統治は「同」を以て「和」とし、社会主義革命の歴史と建国後の社会主義建設の時期も、闘争のロジックが依然として社会に広く浸透した。「文革」はこのロジック発展の極端だと言えよう。改革開放の政策を取った後の80年代にも、この思潮はいまだ根強く生き残っている。例えば、80年代の末、中国哲学界の代表的な学者張立文氏は「和」の原理を中心に「和合学」理論を提唱し始めた際、学界からいろいろな抵抗と批判を受けた。この現象は当時の中国社会において伝統的な「闘争」的価値観が生きていたことを物語る。我々は、場合によっては「闘争」は自己の生き残りに必要な手段であることを否定しない。例えば、近代中国では、西洋列強の暴力に対抗して、全国人民の力を結束し、同じく暴力を用いて抵抗せざるを得なかった。しかし、暴力革命によって国を守った後、平和な国づくりを進行する過程の中で、不幸なことに、嘗て覚えた暴力行使の快感に溺れてしまった人々は、依然として暴力原理を信仰する。結局、社会主義の国作り過程は紆余曲折の道を辿らざるを得ず、困難にぶち当たり、さらに悲劇にまで発展したのである。「我ら」世代はこれらを見て幼年時代を過ごした、或いは彼らの成長の環境はこの過程であったとも言える。

幸いに、「我ら」は青春時代に入った時、一つの新しい時代に遭遇した。それは、改革

開放、続いて市場経済、国際化、グローバル化等であり、これらの外部環境は「我ら」に価値観を見直すきっかけを提供した。まさにそれが故、「我ら」は先輩たちの誤りを克服することが出来、過去の暗い影から脱出し、陽光の中に歩み出した。周慶栄は『我ら・2』を書く前に、『高地の陽光』を世に送り出し、その作品の中に、彼は「われ四肢を伸ばし、太陽光を全身に浴びせ、湿りに関わる記憶を乾かし、寒さに関わる記憶を追い払い、梅雨の季節に起きた感情物語を蒸発させ、頭の上に、それを一枚の忠実な紅葉に」と、感無量に願い、さらに、自分は「徹底的に生命の中のあらゆる暗影を光に晒す」と宣言する。

「我ら」世代は、まさに生命の中の暗い影と決別することの出来るが故に、「闘争」をやめ、和解を目指すことを提唱するのである。これによって、伝統的となったような「同」の生存原理と決別し、自分の手で「和」の架け橋を架けるのである。そこで、「我ら」の価値観は、相手を死なせ、自分を活かすような闘争では絶対になく、それは数千年以来、わが祖先が繰り返して提唱した「己立たんと欲して人を立て」、「己達せんと欲して人を達す」という共存共栄の理想に他ならない。『我ら』を紐解けば、作者は至る所で「我ら」が持っているこれに通ずる胸襟の告白を聞かせる。例えば、「我らが最も幸せだと感ずることとは、私たちの中の不幸な人々とも、一緒に幸福になること」（第14章）、「世界中多くのことは自分一人だけでは成し遂げ得ないのだ」（第12章）、「嘗て如何なる苦難と暗黒があったにせよ、既に過去のことである」等等、これらのように高らかに謳う句は、その価値観の一面を伺わせると言えよう。

このような価値観を持った「我ら」世代は歴史の舞台に登場し、時代の主役になった時、海は百川を受け入れるような姿勢を取り、その役柄を演じるのは当然なことである。作者は人々に告げる：「我ら世代」の理想は「人の一人一人に自分の空間を持たせる」（第7章）のだ、これは「成人の遊戯」であり、「歴史における古い掟」に符合する。こうしてこそ、「我ら」が「美しさへと歩む」、この美しさが故に「世界に意義が成長する」、したがって、「我ら」は「意義のために生きる」（第15章）のだと。これらの告白は、明らかに憎しみや闘争を放棄する意義から獲得する認識であり、まさに寛容さから齎された生きる意義である。前にもちょっと触れた彼の「溪谷に恋着する」という生の憧れは、まさにこのような胸襟を前提にしたからこそ発せる崇高な心の声である。

従って、これらの先人たちと峻別した高邁な理想と寛容な価値観は、歴史が「我ら」の存在を認めざるを得ない確証となり、しかも、このような斬新な声は、現代中国の歴史が抑えられぬ新たな時代を切り拓く力の源泉であると、筆者は信ずる。

（* 林美茂、中国人民大学哲学院助教授。ペンネーム霊焚、散文詩人）

参考文献

- 1, 周庆荣著, 2010年, 《我们》, 南京, 译林出版社。
- 2, 王光明著, 2003年, 《现代汉诗的百年演变》, 石家庄, 河北人民出版社。
- 3, 刘福春著, 2004年, 《新诗纪实》, 北京, 学苑出版社。
- 4, 关正文编, 1986年, 《五人诗选》, 北京, 作家出版社。
- 5, 洪子诚・程光炜共编, 2006年, 《第三代诗新编》, 武汉, 长江文艺出版社。
- 6, 张新颖编, 2004年, 《中国新诗 1916-2000》, 上海, 复旦大学出版社
- 7, 谭五昌编, 2004年, 《新诗白皮书》, 北京, 昆仑出版社。
- 8, 吉田賢抗著, 昭和 35 年, 『新釈漢文大系 1・論語』、東京、明治書院。
- 9, 是永駿編訳, 1992 年, 『中国現代詩三十人集—モダンニズム詩のルネサンス』, 東京、凱風社